「児童・生徒の震災後意識調査」の報告

平成24年３月

公益財団法人　日本教材文化研究財団

はじめに

この調査は、人類史上未曽有の災害をもたらした、東日本大震災後の子どもの生活や意識の変化について、基礎的な資料を得るために実施したものです。

2011年３月11日に発生した東日本大震災によって、私たちの生活や意識は大きく変化しました。節電をはじめとした省エネと倹約、被災地の人々への経済的支援やボランティア活動、家族の精神的な絆の再確認、利他的で共存的な生き方への意識、防災意識と食の安全性への意識など、私たちが安全にそして支え合って生きていくための新しい生き方を模索している過程にあるといってもよいでしょう。

そうした利他的で省資源を考える持続可能な社会の構築に向けて、私たち大人が少しずつ前に進もうとしているとき、その一方で子どもたちはどのように生活し、どのような意識や人生観、そして将来の夢をもって生きようとしているかを知ることは、これからの教育の在り方を考えるうえで必要不可欠なことです。

学校における防災教育や心と命の教育の在り方を考えるとともに、家庭においても、家族の絆を深めるための団らんやコミュニケーションを大切にした家庭教育の在り方を再検討するために、震災後の最新の子どもの生活状況と意識について調べることが大切になるのです。

幸い、公益財団法人日本教材文化研究財団のご支援により、全国で600名の小中学生とそのご家庭にご協力を得て、この全国調査をインターネット上で実施することができました。特に甚大な被害を受けられました岩手県、宮城県、そして福島県のご家庭の皆様に、御苦労の多い毎日でありながら、本調査研究にご協力くださいましたことに､改めまして御礼を申し上げます｡ありがとうございました。

この調査報告書が、我が国における震災後の教育の在り方を再構築するために、わずかでも貢献できることがあれば望外の喜びです。

平成24年２月10日

監修者　早稲田大学教職大学院
教授　田中　博之

１．調査概要

このアンケート調査の概要は、次の通りである。

（１）調査目的

本調査は、東北大震災の震災前と震災後で、生活者の意識や行動が変化している中で、子どもたちに起きている変化を把握し、今後の学校教育と家庭教育のあり方を考えるための基礎資料とすることを目的としている。

（２）調査対象

全国の小中学生、600名。震災認知者であること。震災後意識アンケートの協力に同意してくれること。小学校４年生から中学校３年生までの各学年において、男女それぞれに50名ずつ。回答者数がそれぞれの枠で、50名に達したところで締め切る。

（３）調査方法

インターネット調査による。（調査協力：(株)電通ママラボ　(株)電通マーケティングインサイト）

［調査の流れ］

STEP１　調査対象の小中学生がいる母親。震災内容が調査に含まれること。

STEP２　本調査部分は、子ども本人が回答する。なお、小学生については、子どもと保護者が一緒に回答をするが、保護者には事前に、「５か条のお約束」に同意してもらう。

［５か条のお約束］

①代わりにこたえないこと。

②無理強いしないこと。

③誘導しないこと。

④どんな回答をしても叱らないこと。

⑤急がせないこと。

小学校４年生から中学校３年生まで、同一の質問項目で実施する。

（４）質問紙項目

３領域（学校での生活の変化・家での生活の変化・思うことの変化）にわたる全23項目（巻末資料参照）。４件法による回答。

（５）調査期間

平成23年11月26日（土）～11月28日（月）の３日間

（６）回答状況

①子どもの学齢と回答数

小学校４年生から中学校３年生までの各学年において、男女それぞれに50名ずつ、合計600名。回答率100％。

図表１　子どもの学齢

【基数：対象者全体】（％）

小4 男子	小5 男子	小6 男子	小4 女子	小5 女子	小6 女子	中1 男子	中2 男子	中3 男子	中1 女子	中2 女子	中3 女子
8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3

②居住エリアの比率

図表２　居住エリア区分

【基数：対象者全体】（％）

北海道	東北	関東・甲信越	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
4.2	5.5	42.5	11.7	20.8	6.7	8.7

③東西区分の比率

図表３　東西区分

【基数：対象者全体】（％）

東日本	西日本
54.2	45.8

④被災地の比率（東北３県　岩手県、宮城県、福島県）

図表４　被災地（３県・・岩手、宮城、福島）

【基数：対象者全体】（％）

被災地（3県）	被災地（3県）以外
3.0	97.0

⑤被災地の比率（東北３県及び茨城県、千葉県）

図表５　被災地（５県・・３県＋茨城、千葉）

【基数：対象者全体】（％）

被災地（5県）	被災地（5県）以外
9.5	90.5

２．調査結果と考察

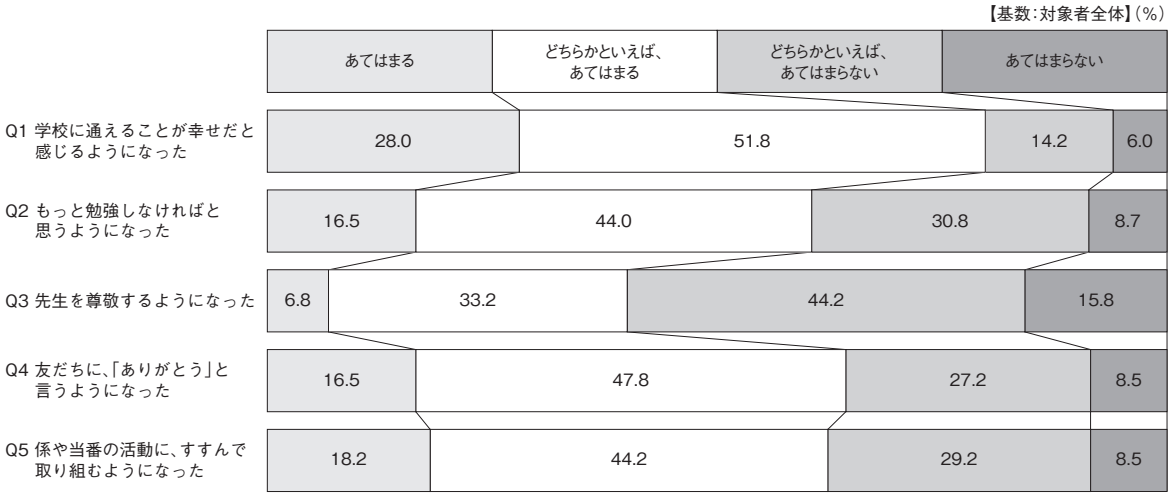
次に、領域別に調査結果の分析と考察を行う。領域１は、「学校での生活の変化」に関するもので、全５項目の質問項目を含んでいる。領域２は、「家での生活の変化」に関するもので、全９項目の質問項目を含んでいる。この領域２「家での生活の変化」については、質問項目数が多いため、「心情の変化」と「行動の変化」に分割して結果の分析と考察を行う。そして、領域３は、「思うことの変化」に関するもので、特に将来の夢や人生観などについて問う全９項目の質問項目を含んでいる。

【領域１　学校での生活の変化】

（１）全体の傾向

震災後の「学校での生活の変化」を見るために、図表６にあるような５つの質問項目を設定した。それぞれの質問項目の趣旨は、Ｑ１「学校に通える幸せ」、Ｑ２「勉強への意欲」、Ｑ３「先生への尊敬」、Ｑ４「友だちへの感謝」、Ｑ５「学校での役割遂行」である。本調査は、震災後に一回のみ実施するものであるため、各質問項目の語尾に「～ようになった。」と付加することにより、震災前と震災後の行動と心情の変化をとらえられるように工夫した。この点については、以下のすべての領域の質問項目にもあてはまる。

図表６　【Ｑ１～５】学校生活について



では、全調査対象者である600名の全体的な回答傾向をみてみよう。

全体的には、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」を除いて、すべての項目で肯定率（「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」の回答を合計して算出した比率）が60％を超えていることから、震災後に、多くの児童生徒において幸せや感謝の気持ちを感じたり、勉強や学校での役割への積極性が高まったりしたことがわかる。

中でも、Ｑ１「学校に通えることが幸せだと感じるようになった」という項目の肯定率は、600名の全体の回答者の内、ほぼ80％であったことから、ほとんどの児童生徒は震災後に、学校に通えなくなった被災地の子どもたちの状況を知ることにより、学校へ通えることのありがたさを強く感じるようになったことがわかる。学校には、一緒に遊んだり学んだりすることができる友だちがいる。そのこ

とのかけがえのなさに、多くの子どもたちが気づいたといえるだろう。

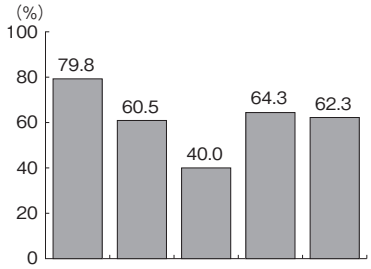
これらの５項目の中で、全体における肯定率が50％に満たなかった唯一の質問項目は、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」であり、その肯定率は40％であった。その原因を推測してみると、一つには、被災地以外の都道府県では震災後に学校の教師が、必ずしも特別に児童生徒の安全を守ったり危険から回避させたりしていないと考えられることから、通常の指導の範囲内での防災教育を行うだけでは、教師への尊敬が高まらないことは自然なことであろう。二つ目には、被災地での避難時における学校側の対応の課題がテレビなどで幾度となく伝えられていることも影響しているかもしれない。

しかし、次の「被災地の特徴」でみるように、被災地３県においてはこの項目における児童生徒の肯定率は、他の都道府県の肯定率が過半数に満たない中で、60％を超えることから、被災地３県における学校の教員の避難や復興・復旧、そして防災教育における努力や取り組みによって、被災地の多くの児童生徒は先生を尊敬するようになっているという結果になった。これは、被災地３県だけでなく全国の学校関係者や保護者に勇気と希望を与えるものであろう。

（２）エリア別の傾向

次に、エリア別の回答傾向をみてみよう。図表７に、「エリア別」「性別」「学年別」「性別×学年別」にみた、学校生活の変化に関する５つの質問項目への回答を整理した。

図表７　【Ｑ１～５】学校生活について



		(N)	学校に通えることが幸せだと感じるようになった	もっと勉強しなければと思うようになった	先生を尊敬するようになった	友だちに、「ありがとう」と言うようになった	係や当番の活動に、すすんで取り組むようになった
全　体		600	79.8	60.5	40.0	64.3	62.3
エリア区分	北海道	＊25	60.0	44.0	32.0	56.0	60.0
	東北	33	78.8	57.6	51.5	57.6	63.6
	関東・甲信越	255	79.6	61.6	40.8	65.1	61.2
	中部	70	78.6	57.1	42.9	55.7	64.3
	近畿	125	78.4	59.2	36.0	62.4	57.6
	中国・四国	40	92.5	67.5	47.5	80.0	80.0
	九州・沖縄	52	86.5	67.3	32.7	73.1	63.5
東西エリア区分	東日本	325	77.5	59.4	40.9	63.1	61.5
	西日本	275	82.5	61.8	38.9	65.8	63.3
子ども性別	男子	300	75.7	55.0	40.3	58.3	59.0
	女子	300	84.0	66.0	39.7	70.3	65.7
学年別	小学生（計）	300	81.7	59.0	48.0	65.7	65.3
	小学４年生	100	80.0	53.0	50.0	63.0	63.0
	小学５年生	100	84.0	59.0	49.0	65.0	64.0
	小学６年生	100	81.0	65.0	45.0	69.0	69.0
	中学生（計）	300	78.0	62.0	32.0	63.0	59.3
	中学１年生	100	73.0	57.0	30.0	64.0	57.0
	中学２年生	100	83.0	60.0	27.0	64.0	60.0
	中学３年生	100	78.0	69.0	39.0	61.0	61.0

【基数:対象者全体】

		(N)	学校に通えることが幸せだと感じるようになった	もっと勉強しなければと思うようになった	先生を尊敬するようになった	友だちに、「ありがとう」と言うようになった	係や当番の活動に、すすんで取り組むようになった
全　体		600	79.8	60.5	40.0	64.3	62.3
性別×学年別	小学生・男子	150	79.3	53.3	51.3	62.7	64.0
	小学４年生・男子	50	78.0	52.0	50.0	62.0	64.0
	小学５年生・男子	50	82.0	52.0	60.0	64.0	62.0
	小学６年生・男子	50	78.0	56.0	44.0	62.0	66.0
	小学生・女子	150	84.0	64.7	44.7	68.7	66.7
	小学４年生・女子	50	82.0	54.0	50.0	64.0	62.0
	小学５年生・女子	50	86.0	66.0	38.0	66.0	66.0
	小学６年生・女子	50	84.0	74.0	46.0	76.0	72.0
	中学生・男子	150	72.0	56.7	29.3	54.0	54.0
	中学１年生・男子	50	64.0	60.0	32.0	58.0	58.0
	中学２年生・男子	50	80.0	50.0	24.0	52.0	52.0
	中学３年生・男子	50	72.0	60.0	32.0	52.0	52.0
	中学生・女子	150	84.0	67.3	34.7	72.0	64.7
	中学１年生・女子	50	82.0	54.0	28.0	70.0	56.0
	中学２年生・女子	50	86.0	70.0	30.0	76.0	68.0
	中学３年生・女子	50	84.0	78.0	46.0	70.0	70.0

【基数:対象者全体】

まず、「エリア区分」と表示している欄をみてみよう。そこには、北海道から九州･沖縄まで、全国を７つのエリアに分けて、それぞれの回答状況を肯定率によって表している。

一つ目の特徴として、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」という項目は、調査対象者600名全体の回答では肯定率が40％と最も低かったが、被災地を含む「東北」エリアでは、51.5％と最も高い肯定率を示している。この項目では、被災地から遠いエリアほど肯定率が低くなる傾向が一貫していることがわかる。ただし、「中国・四国」エリアでは、肯定率が47.5％（全エリア中２位）となっているが、これは後述するように、調査実施時期のほぼ一週間前にあたる、11月21日に広島県北部でM5.4、最大震度５弱の地震があり重傷者も出ていることから、小規模であっても震災の影響があると、児童生徒の「先生への尊敬」は高くなるといえるだろう。したがって、児童生徒においては、震災は小規模であれ、「先生への尊敬」の意識に強く影響を及ぼしているといえる。

このように、震災と「学校での生活の変化」の関係についてみてみると、二つ目の特徴として、全質問項目にわたって、「中国･四国」エリアに属する児童生徒の肯定率が最も高くなる傾向がある。すでにみたように、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」においても、２位ではあるが47.5％と質問項目内では高い肯定率となっている。ただし、直近で震災があった「中国・四国」エリアを除いて、東北大震災の被災地を含む「東北」エリアが全ての項目で１位になっているかというと、そうではないことから、震災からの時間経過などが要因となり、「東北」エリアにおいては、Ｑ３を除いてそれほど高い肯定率がみられなかったのかもしれない。

その一方で、三つ目の特徴として、「九州･沖縄」エリアでは、ほとんどの項目で２位程度の高い肯定率を示しているにもかかわらず、つまり、震災後に学校での生活が変化したと回答しているにもかかわらず、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」という項目においては、32.7％と７エリア中で６位という低い結果となっており、項目によって大きな差が生じているが、その原因は明らかではない。

その反対に、「北海道」エリアにおいては、ほぼ全ての項目で全エリア中６位または７位となっており、低い肯定率となっている。これは、被災地からの距離の遠さでは説明できないことであり、原因は明らかではない。ただし、「北海道」エリアの調査対象者は、全体の4.2％、実数で25名という少数であるために、その結果については参考値としてみる必要があるだろう。

なお、東日本・西日本というエリア区分間での一貫した明確な特徴はみられなかった。

（３）学年別・性別の傾向

同じ図表７から、まず性別による回答の違いがあるかどうかをみてみると、僅差で逆転しているＱ３を除いて、全ての項目で女子が高い肯定率を示しており、特に10％以上の肯定率の差がある項目は、Ｑ２「もっと勉強しなければと思うようになった」とＱ４「友だちに、『ありがとう』と言うようになった」という２つの項目であった。このことから、全体的に女子の方が震災の影響を受けやすく、震災後に努力や感謝という点において変化が大きいといえる。

次に、学年による回答の違いがあるかどうかをみてみると、明らかな傾向が読み取れるのは、Ｑ３「先生を尊敬するようになった」という項目で、小学生の方が中学生に比べて高い肯定率を示している。これは、中学３年生においてわずかな違いが見られるものの、一貫して学年が上がるにつれて肯定率が低下しており、非常にはっきりした特徴として表れている。その原因としてはいくつか考えられるが、例えば、①年齢が下がるほど教師を頼るべき存在として認識する傾向があること、②小学校教師の方が震災後に防災教育や心の教育を積極的に実施したこと、③小学校教師の方が震災時の避難の仕方について、震災後に児童に具体的な方法を指示したこと、などが想定される。

さらに、性別と学年をかけ合わせて回答状況の特徴をみてみると、すべてに明らかにしたように、Q３においては、小学生の方が中学生よりも高い肯定率を示しており、そこに性差はあまり存在していない。わずかな差異としては、小学５年女子がやや肯定率が低いことと、逆に、中学３年女子がやや肯定率が高いことがあげられるが、この調査だけからは原因を特定することはできない。

その他にみられる特徴としては、ほとんどの項目において、中学男子が中学女子に比べて、肯定率が低い傾向にある。先に性別についてみたように、ほとんどの項目において女子の方が男子よりも肯定率が高い傾向がみられたが、それは中学生においてより顕著にみられることがわかる。その原因は明らかではないが、これからの防災教育や震災に関わる心の教育において、例えば、男女間で話し合わせる時間を多く取ったり、男女間での教え合いや助け合いのあり方について考えさせたりするなど、意識や行動の変化に関する性差に配慮することが求められるだろう。

（４）被災地の特徴

最後に、図表８により、被災地の児童生徒に特徴的な回答がみられるかどうかについて、検討してみる。

図表８　【Q１～５】学校生活について

		(N)	学校に通えることが幸せだと感じるようになった	もっと勉強しなければと思うようになった	先生を尊敬するようになった	友だちに、「ありがとう」と言えるようになった	係や当番の活動に、すすんで取り組むようになった
全　体		600	79.8	60.5	40.0	64.3	62.3
被災地	被災地（３県）	＊18	77.8	66.7	61.1	55.6	61.1
	被災地（３県）以外	582	79.9	60.3	39.3	64.6	62.4
	被災地（５県）	57	78.9	56.1	47.4	57.9	66.7
	被災地（５県）以外	543	79.9	61.0	39.2	65.0	61.9

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　　【基数:対象者全体】

すでにみたように、最も明らかな特徴は、Q３「先生を尊敬するようになった」という項目において、被災地３県でも被災地５県でも、被災地の児童生徒はそれ以外の都道府県の児童生徒と比較して、高い肯定率を示している。被災地３県での集計は、18名のみの回答であったため参考値ではあるが、被災地の児童生徒は、より「先生への尊敬」を強く感じるようになっている。その原因として予想されることは、すでに述べた通りであるが、被災地の先生方の努力がはっきりと児童生徒の意識によい影響を及ぼしていることがわかる。この結果は、被災地だけでなく全国の学校関係者に勇気と希望を与えるものであろう。

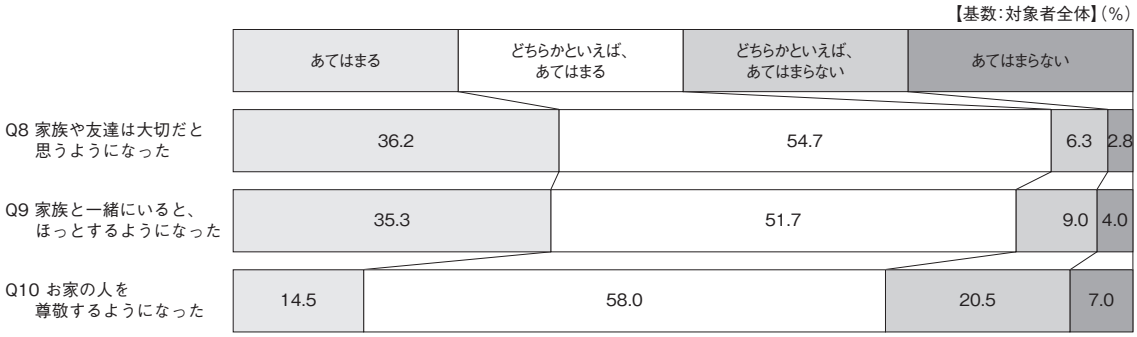
ただし他の４つの項目については、被災地とその他の地域で、震災からの時間経過もあるためか、児童生徒の学校での生活の変化はあまり大きくないようである。

【領域２　家での生活の変化】（心情の変化）

（１）全体の傾向

次に領域２「家での生活の変化」における質問項目の中で、まず「心情の変化」に関わる３項目について、それぞれの回答傾向をみてみよう。質問項目の趣旨は、Ｑ８「家族や友だちの大切さ」、Ｑ９「家族といる安心感」、Q10「お家の人への尊敬」である。図表９は、それぞれの質問項目と、全調査対象者600名の回答結果である。

図表９　【Ｑ８～10】家での生活・心境変化



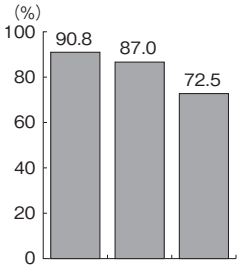
この回答結果から明らかなことは、震災後に全国の児童生徒は、「家族や友だちの大切さ」、「家族といる安心感」、「お家の人への尊敬」という３つの項目すべてにおいて、高い肯定率を示していることである。Ｑ８とＱ９については、およそ90％の児童生徒が肯定的に回答しており、Q10についても70％を超える児童生徒が肯定的に答えている。つまり、全国の子どもたちは、震災後に家庭での心情面の変化が大きく、家族や友だちを大切に思い、家族といると安心感を感じ、そしてお家の人を尊敬するようになっている。

その原因については推測の域を出ないが、震災という命や健康、住む場所や財産さえ奪ってしまう恐れや不安に対して、自分が安心できて落ち着ける場所、そして助け合ったり助けてもらえたりする人は、家庭であり家族や友だちであると子どもたちは感じているといえるだろう。

（２）エリア別の傾向

次に、エリア別の回答傾向をみてみよう。図表10に、「エリア別」「性別」「学年別」「性別×学年別」にみた、学校生活の変化に関する５つの質問項目への回答を整理した。

図表10　【Q８～10】家での生活・心境変化



		(N)	家族や友だちは大切だと思うようになった	家族と一緒にいると、ほっとするようになった	お家の人を尊敬するようになった
全　体		600	90.8	87.0	72.5
エリア区分	北海道	＊25	92.0	84.0	72.0
	東北	33	100.0	97.0	75.8
	関東・甲信越	255	92.2	87.5	73.7
	中部	70	82.9	82.9	68.6
	近畿	125	87.2	83.2	66.4
	中国・四国	40	92.5	90.0	82.5
	九州・沖縄	52	96.2	92.3	76.9
東西エリア区分	東日本	325	92.6	88.0	74.2
	西日本	275	88.7	85.8	70.5
子ども性別	男子	300	90.0	86.7	71.0
	女子	300	91.7	87.3	74.0
学年別	小学生（計）	300	92.3	90.3	77.7
	小学４年生	100	93.0	90.0	77.0
	小学５年生	100	93.0	88.0	79.0
	小学６年生	100	91.0	93.0	77.0
	中学生（計）	300	89.3	83.7	67.3
	中学１年生	100	90.0	84.0	67.0
	中学２年生	100	91.0	86.0	64.0
	中学３年生	100	87.0	81.0	71.0

【基数:対象者全体】

		(N)	家族や友だちは大切だと思うようになった	家族と一緒にいると、ほっとするようになった	お家の人を尊敬するようになった
全　体		600	90.8	87.0	72.5
性別×学年別	小学生・男子	150	93.3	93.3	77.3
	小学４年生・男子	50	98.0	96.0	82.0
	小学５年生・男子	50	92.0	92.0	78.0
	小学６年生・男子	50	90.0	92.0	72.0
	小学生・女子	150	91.3	87.3	78.0
	小学４年生・女子	50	88.0	84.0	72.0
	小学５年生・女子	50	94.0	84.0	80.0
	小学６年生・女子	50	92.0	94.0	82.0
	中学生・男子	150	86.7	80.0	64.7
	中学１年生・男子	50	90.0	80.0	66.0
	中学２年生・男子	50	90.0	86.0	64.0
	中学３年生・男子	50	80.0	74.0	64.0
	中学生・女子	150	92.0	87.3	70.0
	中学１年生・女子	50	90.0	88.0	68.0
	中学２年生・女子	50	92.0	86.0	64.0
	中学３年生・女子	50	94.0	88.0	78.0

【基数:対象者全体】

まず、「エリア区分」と表示している欄をみてみよう。そこには、北海道から九州･沖縄まで、全国を７つのエリアに分けて、それぞれの回答状況を肯定率によって表している。

一つ目の特徴として、領域１「学校での生活の変化」においてエリア別に回答状況を考察したときと同様に、大きな傾向として多くの項目で、「北海道」の肯定率が比較的低く、「九州・沖縄」の肯定率が比較的高いことがわかる。また、直近で小規模ではあるが震災を受けた「中国・四国」エリアの肯定率がやや高くなっており、特に、Q10「お家の人を尊敬するようになった」という項目では、肯定率が82.5％であり、この項目で全エリア中１位となっている。ただしそれ以外の項目における、「中国・四国」エリアのこうした傾向は、領域１「学校での生活の変化」と比べるとそれほど強いものとはいえない。

二つ目の特徴として、「東北」エリアにおいて、Q８「家族や友だちは大切だと思うようになった」とQ９「家族と一緒にいると、ほっとするようになった」という２つの項目の肯定率がそれぞれ100％と97.0％となっており、特に被災地においては、震災後に家族や学校以外での友だちとの関わりの大切さや安心感を強く感じていることがわかった。

なお、東日本・西日本という区分については、それほど大きな差はないものの、すべての項目において２％から５％程度の肯定率の差が生じており、どの項目でも被災地を含む東日本エリアの方が、肯定率が高くなっている。このような傾向は、領域１「学校での生活の変化」においてはみられなかったことから、震災による影響は、児童生徒の家での心情面の変化にやや強く及んでいるといえるだろう。

（３）学年別・性別の傾向

同じ図表10から、まず性別による回答の違いについてみてみると、領域１「学校での生活の変化」にみられたような、女子における肯定率の高さはそれほど大きくはない。唯一、Q10「お家の人を尊敬するようになった」という項目において、女子の方が３％の差で男子よりも肯定率が高くなっている。

このことから、震災の影響に関する性差についてみてみると、男子と比較して女子においては、家庭よりも学校の方により大きな変化を感じていることから、女子は勉強や学校の友だちとの関係により強く震災の影響を受けることがわかる。ただし、このような男女間の差異は、あくまでも男子と女子の肯定率の差の大きさに注目しているのであり、肯定率の大きさそのものは、女子であっても家庭の生活の変化をより強く感じていることに注意したい。

次に、学年による回答の違いをみてみると、領域１と同様に、「尊敬」というキーワードに注目すれば、尊敬の対象が先生であるかお家の人であるかにかかわらず、身近な大人という信頼できる存在を尊敬する傾向が強いのは、小学生の方である。それ以外については、この領域では、回答結果に大きな特徴は見られなかった。

最後に、性別と学年をかけ合わせて回答状況の特徴をみてみると、一つ目の特徴として、中学生男子がQ10「お家の人を尊敬するようになった」という項目において比較的低い肯定率を示している。また、二つ目の特徴として、大変興味深いことに、Ｑ９「家族と一緒にいると、ほっとするようになった」という項目においては、小学生男子が最も肯定率が高く（93.3％）、次に、小学生女子と中学生女子が同率で２位（87.3％）、そして中学生男子が最下位となった（80.0％）。

これら２つの特徴については、原因を明らかに指摘することはできないが、中学生男子が、領域１と領域２とともに、多くの項目で肯定率が比較的低くなるという一貫した結果が出ているので、これからの震災や防災に関わる教育のあり方について考えるときの一つの手がかりになるかもしれない。

（４）被災地の特徴

最後に、図表11により、被災地の児童生徒にどのような特徴的な回答がみられるかについて、検討してみる。

図表11　【Ｑ８～10】家での生活・心境変化

		(N)	家族や友だちは大切だと思うようになった	家族と一緒にいると、ほっとするようになった	お家の人を尊敬するようになった
全　体		600	90.8	87.0	72.5
被災地	被災地（３県）	＊18	100.0	100.0	77.8
	被災地（３県）以外	582	90.5	86.6	72.3
	被災地（５県）	57	94.7	89.5	75.4
	被災地（５県）以外	543	90.4	86.7	72.2

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　　【基数:対象者全体】

領域１「学校での生活の変化」とは異なり、領域２「家庭での生活の変化（心情の変化）」においては、被災地３県での肯定率が、全３項目においてすべて１位となっており、特に、Ｑ８とＱ９においては、100％である。つまり、被災地３県の児童生徒は、震災後に家族や学校以外での友だちをとても大切に思うようになり、一緒にいることで強い安心感を感じている。また、学校の教師よりもさ

らに強くお家の人を尊敬するようになっている。

このことは、明らかに震災後の被災地における命や健康、そして住居や財産などに関わる大きな課題を、家族や友だちとの支え合いや励まし合いによって克服している様子がうかがえる。小学生と中学生の子どもたちにとって、頼りにしているのはやはり家族や身近な友だちなのであろう。

もちろん、本調査にご協力いただいたそれぞれのご家庭においては、被災の状況や程度に違いがあることが予想されるが、少なくとも震災による甚大な被害があった被災地３県の子どもたちが、100％という絶対的な肯定率で、家族や友だちの大切さや一緒にいる安心感をより強く感じるようになったという事実は、私たち日本人にとって、今後ますます、家族や友だちとの絆の大切さを考える上で貴重な教えとなるであろう。

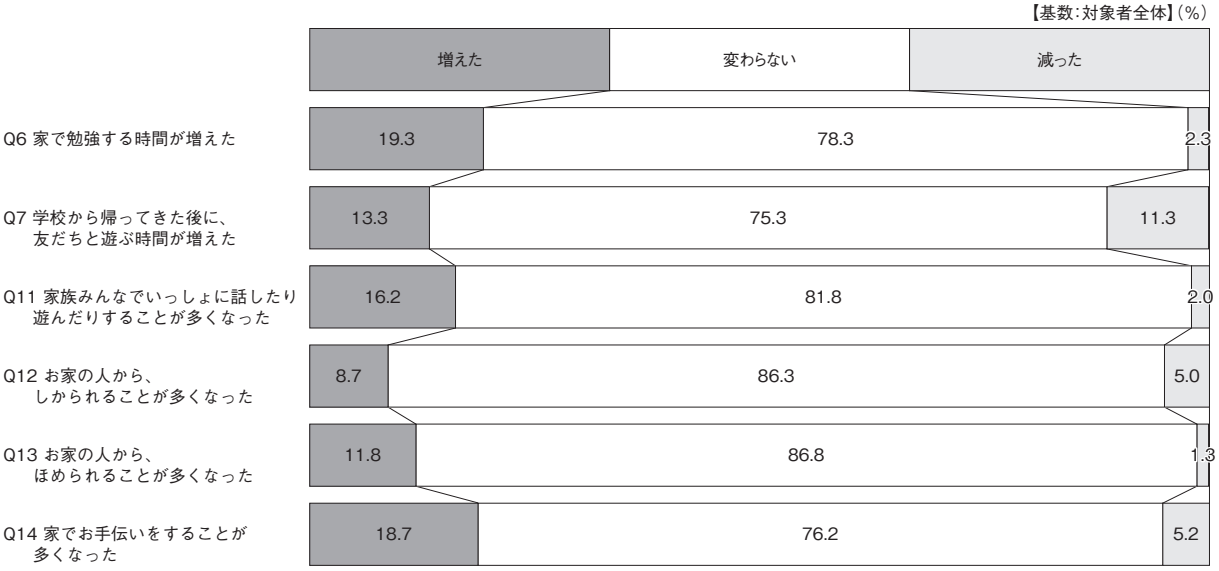
なお、この分析でも、被災地３県での集計は、18名のみの回答（全体の５％未満）であったため参考値である。

【領域２　家での生活の変化】（行動の変化）

（１）全体の傾向

領域２「家での生活の変化」における質問項目の中で、次に「行動の変化」に関わる６項目について、それぞれの回答傾向をみてみよう。質問項目の趣旨は、Ｑ６「勉強時間」、Ｑ７「友だちと遊ぶ時間」、Q11「家族と過ごす時間」、Q12「しかられること」、Q13「ほめられること」、Q14「お手伝い」である。図表12は、それぞれの質問項目と、全調査対象者600名の回答結果である。

図表12　【Q6,7,11～14】家での生活・行動変化



この回答結果から明らかになったことは、心情面での変化と比較して、行動面の変化は小さいということである。震災後の家での生活の行動面に現れた変化は、どの項目においも、20％未満と小さい。その逆に、７割から８割という、ほとんどの児童生徒は、行動面での生活の変化について、「変わら

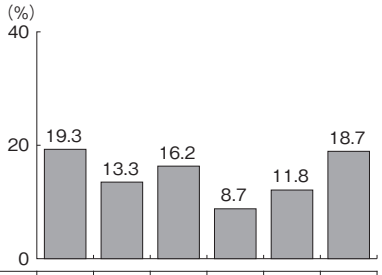
ない」と答えている。

つまり、震災の影響は、児童生徒の心情面には出やすいが、行動面にはあまり及ばないようである。

（２）エリア別の傾向

次に、エリア別の回答傾向をみてみよう。図表13に、「エリア別」「性別」「学年別」「性別×学年別」にみた、学校生活の変化に関する５つの質問項目への回答を整理した。

図表13　【Q6,7,11～14】家での生活・行動変化



		(N)	家で勉強する時間が増えた	学校から帰って来た後に、友だちと遊ぶ時間が増えた	家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった	お家の人から、しかられることが多くなった	お家の人から、ほめられることが多くなった	家でお手伝いをすることが多くなった
全　体		600	19.3	13.3	16.2	8.7	11.8	18.7
エリア区分	北海道	＊25	20.0	16.0	12.0	4.0	12.0	12.0
	東北	33	21.2	21.2	36.4	15.2	24.2	45.5
	関東・甲信越	255	22.7	13.7	14.9	8.2	11.4	18.4
	中部	70	14.3	8.6	12.9	8.6	12.9	17.1
	近畿	125	16.0	12.8	16.0	7.2	10.4	17.6
	中国・四国	40	10.0	15.0	20.0	15.0	7.5	17.5
	九州・沖縄	52	23.1	11.5	13.5	7.7	11.5	11.5
東西エリア区分	東日本	325	21.5	14.5	16.6	8.9	12.9	20.3
	西日本	275	16.7	12.0	15.6	8.4	10.5	16.7
子ども性別	男子	300	15.3	14.3	16.0	8.7	12.3	17.7
	女子	300	23.3	12.3	16.3	8.7	11.3	19.7
学年別	小学生（計）	300	12.7	21.7	17.3	10.3	14.7	24.7
	小学４年生	100	11.0	24.0	15.0	14.0	14.0	21.0
	小学５年生	100	12.0	15.0	15.0	4.0	14.0	23.0
	小学６年生	100	15.0	26.0	22.0	13.0	16.0	30.0
	中学生（計）	300	26.0	5.0	15.0	7.0	9.0	12.7
	中学１年生	100	22.0	4.0	15.0	9.0	10.0	12.0
	中学２年生	100	16.0	7.0	14.0	6.0	10.0	14.0
	中学３年生	100	40.0	4.0	16.0	6.0	7.0	12.0

【基数:対象者全体】

		(N)	家で勉強する時間が増えた	学校から帰って来た後に、友だちと遊ぶ時間が増えた	家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった	お家の人から、しかられることが多くなった	お家の人から、ほめられることが多くなった	家でお手伝いをすることが多くなった
全　体		600	19.3	13.3	16.2	8.7	11.8	18.7
性別×学年別	小学生・男子	150	10.0	23.3	18.0	10.7	14.7	22.0
	小学４年生・男子	50	6.0	24.0	14.0	14.0	12.0	16.0
	小学５年生・男子	50	12.0	18.0	18.0	6.0	16.0	24.0
	小学６年生・男子	50	12.0	28.0	22.0	12.0	16.0	26.0
	小学生・女子	150	15.3	20.0	16.7	10.0	14.7	27.3
	小学４年生・女子	50	16.0	24.0	16.0	14.0	16.0	26.0
	小学５年生・女子	50	12.0	12.0	12.0	2.0	12.0	22.0
	小学６年生・女子	50	18.0	24.0	22.0	14.0	16.0	34.0
	中学生・男子	150	20.7	5.3	14.0	6.7	10.0	13.3
	中学１年生・男子	50	18.0	2.0	16.0	8.0	8.0	14.0
	中学２年生・男子	50	12.0	8.0	14.0	8.0	14.0	14.0
	中学３年生・男子	50	32.0	6.0	12.0	4.0	8.0	12.0
	中学生・女子	150	31.3	4.7	16.0	7.3	8.0	12.0
	中学１年生・女子	50	26.0	6.0	14.0	10.0	12.0	10.0
	中学２年生・女子	50	20.0	6.0	14.0	4.0	6.0	14.0
	中学３年生・女子	50	48.0	2.0	20.0	8.0	6.0	12.0

【基数:対象者全体】

これまでと同様にして、「エリア区分」と表示している欄をみてみよう。そこには、北海道から九州・沖縄まで、全国を７つのエリアに分けて、それぞれの回答状況を肯定率によって表している。

一つ目の特徴として、全体的傾向としてはこの度の東北大震災は、児童生徒の行動面での変化には強い影響を及ぼしていないが、エリア別にみてみると、被災地を含む「東北」エリアにおいて、明らかに「増えた」「多くなった」という肯定的な回答が多くなっていることがわかる。その中でも特に、Q11「家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった」と、Q13「お家の人から、ほめられることが多くなった」、さらに、Q14「家でお手伝いをすることが多くなった」という３つの項目では、16.2％が36.4％に、11.8％が24.2％に、そして18.7％が45.5％にというようにして、それぞれの全体の平均値の倍以上の肯定率を示している。お手伝いが増えたという児童生徒は、「東北」エリアでは45.5％にもなっていることが際立っている。

つまり、被災地を含む「東北」エリアでは、震災の影響を強く受け被災の程度も大きかったことか

ら、子どもたちは家族に絆を求め、お手伝いなど家での役割をしっかりと分担することでほめられる機会が増えているという状況がみえてくる。震災によって大きな課題を受けながらも、多くの子どもたちが家族とともに絆を深め、支え合いながら生活をしていることがわかる。

東日本・西日本という「東西エリア区分」でみたところ、肯定率（増えた、または、多くなった）に大きな差異はないが、どの項目についても、被災地のある東日本において肯定率がやや高い傾向がある。これは、領域２「家での生活の変化」の心情面での変化と共通する傾向である。このことから、「家での生活の変化」は、心情面でも行動面でも、被災地からの距離に若干の影響を受けやすいといえるかもしれない。

（３）学年別・性別の傾向

同じ図表13から、まず性別による回答の違いについてみてみると、男子と女子の間に、大きな差異はみられない。最も大きな肯定率の差は、Ｑ６「家で勉強する時間が増えた」であり、8%となっている。それ以外の項目では、肯定率において男子がより高くなる項目が２つ、男女同率となる項目が１つ、そして女子がより高くなる項目が２つというように、性差で一貫した結果はみられない。

次に、学年による回答の違いをみてみると、３つの顕著な結果がみられた。一つ目は、Ｑ６「家で勉強する時間が増えた」という項目では、全体の平均値が19.3%であるのに対して、中学３年生が40.0%という高い肯定率を示していることである。これは、震災後にしっかりと勉強をして将来の生き方や就業に備えようとする態度が、高等学校の受験が間近に迫った学年に強く表れていることを示している。二つ目は、Ｑ７「学校から帰ってきた後に、友だちと遊ぶ時間が増えた」という項目において、小学生の肯定率が21.7%、そして中学生の肯定率が5.0%というように、はっきりと学年差がみられたことである。この項目については、「東北」エリアでの肯定率が高いことから、被災地や被災地に近い地域では、小学生は友だちとの遊びを通して安心感を得たり、不安を解消したりしていると考えられる。そして三つ目は、Q14「家でお手伝いをすることが多くなった」という項目において、小学生の肯定率が24.7%、そして中学生の肯定率が12.7%というように、はっきりと学年差がみられたことである。この項目についても、「東北」エリアでの肯定率が高いことから、被災地や被災地に近い地域では、小学生はお手伝いを通して家族の役に立とうとする利他的な行動を取るようになっていると考えられる。

さらに大きな学年差ではないが、また、肯定率の絶対値としては少数（10%台）であるが、小学生の方が、Q12とQ13の回答結果にみられるように、「しかられること」や「ほめられること」が多い傾向があり、震災の影響で小学生の方が、心理的に不安になって望ましくない行動を取ったり、逆に頑張って家族のためになろうと努力したりというようにして、精神的な不安定さがあるように思われる。

最後に、性別と学年をかけ合わせて回答状況の特徴をみてみると、これまでの学年差の違いがそのまま強く出ているが、性別によるさらなる大きな違いはみられなかった。強いてあげるとすれば、Q14の「お手伝い」において小学６年生が比較的高い肯定率を示していたが、それは小学６年生・女子が特に頑張っていることがわかった（肯定率34.0%）。そして、Ｑ６の「勉強時間」において中学３年生が比較的高い肯定率を示していたが、それは中学３年生・女子が特に頑張っていることがわかった（肯定率48.0%）。このことは、震災の影響によって、各学校段階の最上級生の女子が家庭で勉強やお手伝いを頑張って遂行している様子がうかがえる。

（４）被災地の特徴

最後に、図表14により、被災地の児童生徒にどのような特徴的な回答がみられるかについて、検討してみる。

図表14　【Q6,7,11～14】家での生活・行動変化

		(N)	家で勉強する時間が増えた	学校から帰って来た後に、友だちと遊ぶ時間が増えた	家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった	お家の人から、しかられることが多くなった	お家の人から、ほめられることが多くなった	家でお手伝いをすることが多くなった
全　体		600	19.3	13.3	16.2	8.7	11.8	18.7
被災地	被災地（３県）	＊18	11.1	22.2	38.9	16.7	38.9	44.4
	被災地（３県）以外	582	19.6	13.1	15.5	8.4	11.0	17.9
	被災地（５県）	57	15.8	14.0	21.1	17.5	19.3	26.3
	被災地（５県）以外	543	19.7	13.3	15.7	7.7	11.0	17.9

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　　【基数:対象者全体】

エリア区分による「東北」エリアの分析結果と同様に、被災地３県において、Q11「家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった」と、Q13「お家の人から、ほめられることが多くなった」、さらに、Q14「家でお手伝いをすることが多くなった」という３つの項目で、全体の平均値（それぞれ、16.2％、11.8％、18.7％）よりも肯定率が顕著に高い（それぞれ、38.9％、38.9％、44.4％）ことがわかった。この傾向は、数値は下がるものの被災地５県においてもほぼ同様にみられる。

つまり、被災地では、震災の影響を強く受け被災の程度も大きかったことから、子どもたちは家族に絆を求め、お手伝いなど家での役割をしっかりと分担することでほめられる機会が増えているという状況がみえてくる。震災によって大きな課題を受けながらも、多くの子どもたちが家族とともに絆を深め、支え合いながら生活をしていることがわかる。

ただし、Q12「お家の人から、しかられることが多くなった」という項目における肯定率もわずかではあるが、被災地３県および被災地５県で高くなっていることから、震災による子どもの精神的な不安定さがあると考えられる。

なお、この分析でも、被災地３県での集計は、18名のみの回答（全体の５％未満）であったため参考値である。

【領域３　思うこと（将来の夢・人生観など）の変化】

（１）全体の傾向

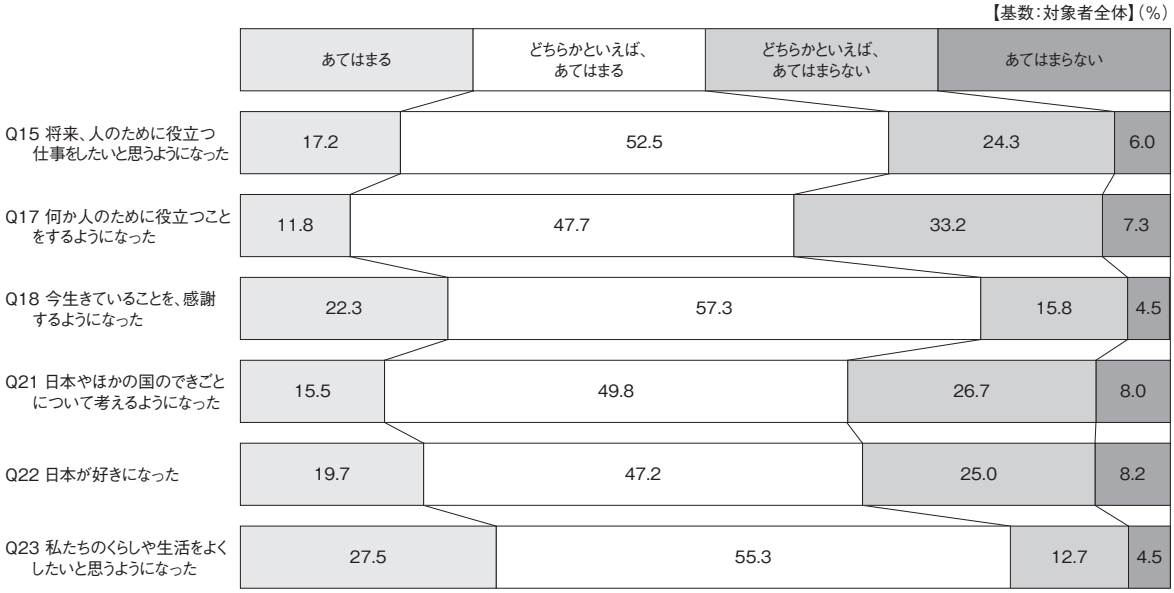
領域３「思うこと（将来の夢・人生観など）の変化」における質問項目について、それぞれの回答傾向をみてみよう。この領域に属する質問項目は、大きく次の３つに分類される。一つ目は、「将来の夢･人生観」に関する項目（６項目）、二つ目は、「尊敬する人」に関する項目（１項目）、そして三つ目は、「地震の前よりも大切だと思うようになったもの」に関する項目（９個の選択肢、家族･友だち・夢・成績・お金・命・健康・助け合い・あてはまるものはない、からの選択）である。

さらに、「将来の夢･人生観」に関する６項目のそれぞれの趣旨は、Q15「人のために役立つ仕事」、Q17「人のために役立つこと」、Q18「生きていることの感謝」、Q21「日本やほかの国への関心」、Q22

「日本への好意」、Q23「くらしや生活をよくする」である。この中で、Q21に「ほかの国」という観点を入れた理由は、今回の大震災で日本に対して支援をしてくれた国が多かったことや、同様の大きな災害を受けている国があることから、この震災をきっかけとして、ほかの国への関心が強まるのではないかという仮説を考えたからである。

ではまず、領域３「思うことの変化」に関わる項目の内、一つ目の分類である「将来の夢・人生観」に関する６項目の回答結果についてみてみよう。図表15は、それぞれの質問項目と、全調査対象者600名の回答結果である。

図表15　【Q15,17～18,21～23】将来の夢・人生観



この回答結果から明らかになったことは、すべての項目において、肯定率がほぼ60％を超えていることから、震災後に、日本の子どもたちは、この領域に含まれる積極的で利他的な価値観、つまり、人のために（利他的な）役立つことをしたいという意識や生きていることの感謝が高まるとともに、日本だけでなく他の国への関心が高まり、さらに日本が好きになり、くらしや生活をよくしようとする意識も高まっていることがわかる。

つまり、日本の子どもたちは、震災による甚大な被害を嘆くばかりではなく、日本の未来をよりよくするために、身の回りのくらしや生活をよくして、日々感謝しながら人のために役立つことをしようとする前向きな生き方を目指すようになったことがわかる。

これら６項目の中で、最も肯定率が高かった項目は、Q23「私たちのくらしや生活をよくしたいと思うようになった」（82.8％）である。次いで肯定率が高かった項目は、Q18「今生きていることを、感謝するようになった」（79.6％）である。

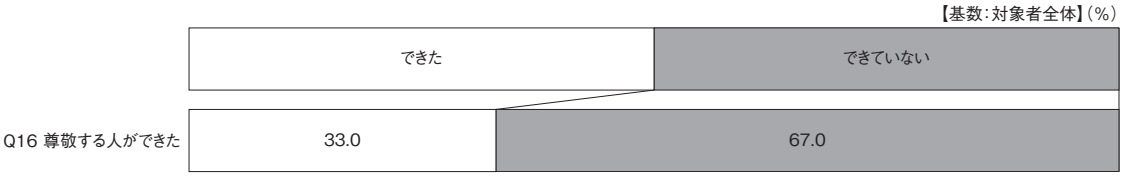
逆に、最も肯定率が低かった項目は、Q17「何か人のために役立つことをするようになった」(59.5％）である。これは、領域２「家での生活の変化」の分析結果と同様に、行動や活動での変化を問う項目の方が、心情や意識面での変化を問う項目よりも、肯定率が低くなる傾向があることと一致しているかもしれない。つまり、「実際に行動するようになった」ことの方が、「そう考えるようになった」ことよりも難しいことだからである。

しかしながら、このQ17についても肯定率が60％近くあることから、日本の子どもたちの実際の利

他的な行動が震災後に増えていることは確かなことであり、大変喜ばしいことである。今後とも、震災をきっかけにしながらも、こうした利他的な行動が日本の子どもたちによってますます積極的に進められていくことを願いたい。

次に、大きな二つ目の分類として、「尊敬する人」に関する項目の回答結果をみてみよう。

図表16　【Q16】将来の夢・人生観

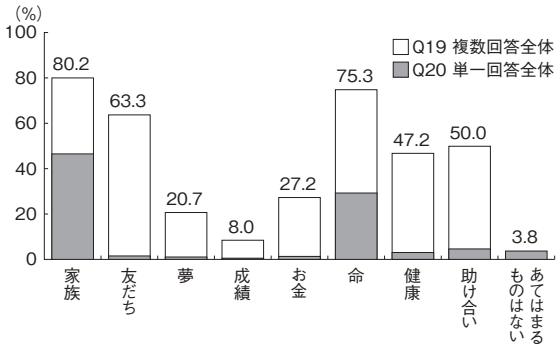


図表16は、Q16「尊敬する人ができた」という項目への全調査対象者600名の回答結果を示している。これをみると、震災後に「尊敬する人ができた」と回答している児童生徒は、全体の33%であった。この結果は、領域１「学校での生活の変化」に含まれる「先生を尊敬するようになった」という項目の全体の肯定率が40%であったこと、さらに、領域２「家での生活の変化」に含まれる「お家の人を尊敬するようになった」という項目の全体の肯定率が72%であったことを考えると、やや低い結果となっている。したがって、児童生徒の意識としては、この項目は、すでに回答した「先生」と「お家の人」を除く他の人というようにとらえているのかもしれない。

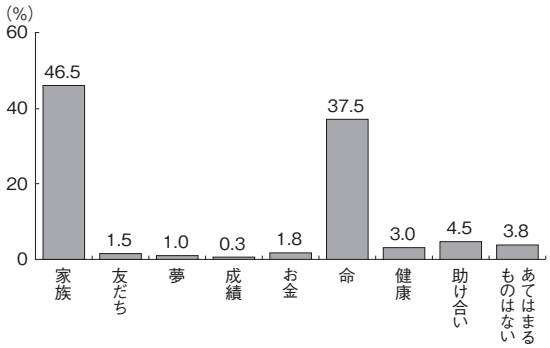
ただし、これからみるように、この項目Q16の「東北」エリアの肯定率が50%を超えていること、さらに、被災地３県のこの項目に関わる肯定率が60%を超えていることから、被災地または被災地に近い地域では、災害からの避難と、震災からの復興・復旧に努力する大人や友だちの利他的な行動をみて、多くの子どもたちが尊敬する人ができたと感じていることがわかる。甚大な災害の中にあっても、人間のよさを感じられる一筋の希望がみえてくる結果となっている。

最後に、大きな分類の３つ目である、Q19「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（複数回答可）」と、同項目で反応形式が異なる項目Q20「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（一番大切だと思うもの１つ）」の２項目について、それぞれの回答結果をみてみよう。

図表17　【Q19,20】地震の前よりも大切なもの



図表18　【Q20】地震の前よりも大切なもの



まず図表17からは、選択率が高かった項目（複数回答可）の順に、家族（80.2%）、命（75.3%）、友だち（63.3%）、助け合い（50.0%）、健康（47.2%）などとなっている。ここから、全国の子どもたちの震災後の意識として、人との絆や利他的な行動を大切にする心と命を大切に思う心が育っているこ

とがわかる。このような人間の肯定的な価値観を大切に思う心が子どもたちの中に育ちつつあるときにこそ、震災と関連づけた心の教育や命の教育を実践することが時宜を得たことになるだろう。

続いて、図表18からは、選択率が高かった項目（単一選択）の順に、家族（46.5％）と命（37.5％）、助け合い（4.5％）となっている。このことから、全国の子どもたちは、震災後の意識として、まず家族を、そして次に命を、最も大切なものとしてとらえていることがわかる。

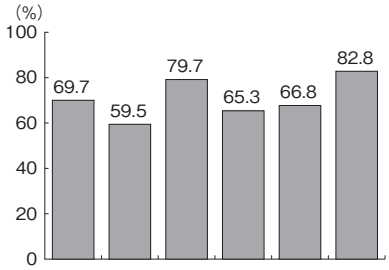
ただし後のエリア別分析でみるように、被災地を含む「東北」エリアの児童生徒については、こうした優先順位が僅差で逆転し、複数回答であっても、また単一回答であっても、選択率で１位が命となり２位が家族となる。

（２）エリア別の傾向

次に、エリア別の回答傾向をみてみよう。

初めに、図表19をみてみると、領域３の内、大きな分類の一つ目にあたる、６項目からなる「将来の夢・人生観」に関する回答の特徴は、２点あった。

図表19　【Q15,17,18,21～23】将来の夢・人生観



		(N)	将来、人のために役立つ仕事をしたいと思うようになった	何か人のために役立つことをするようになった	今生きていることを、感謝するようになった	日本や他の国の出来ごとについて考えるようになった	日本が好きになった	私たちのくらしや生活を良くしたいと思った
全　体		600	69.7	59.5	79.7	65.3	66.8	82.8
エリア区分	北海道	＊25	56.0	60.0	88.0	68.0	64.0	80.0
	東北	33	69.7	69.7	87.9	81.8	66.7	87.9
	関東・甲信越	255	68.2	58.4	75.7	67.5	64.7	82.0
	中部	70	65.7	55.7	80.0	58.6	68.6	75.7
	近畿	125	69.6	60.0	80.0	60.0	64.0	81.6
	中国・四国	40	82.5	65.0	85.0	70.0	87.5	90.0
	九州・沖縄	52	78.8	57.7	84.6	61.5	67.3	92.3
東西エリア区分	東日本	325	67.7	59.4	78.2	68.6	64.3	82.8
	西日本	275	72.0	59.6	81.5	61.5	69.8	82.9
子ども性別	男子	300	67.3	55.3	77.3	63.0	63.7	80.0
	女子	300	72.0	63.7	82.0	67.7	70.0	85.7
学年別	小学生（計）	300	71.7	62.3	79.7	63.7	69.3	84.3
	小学４年生	100	65.0	56.0	77.0	62.0	69.0	82.0
	小学５年生	100	76.0	63.0	83.0	62.0	67.0	87.0
	小学６年生	100	74.0	68.0	79.0	67.0	72.0	84.0
	中学生（計）	300	67.7	56.7	79.7	67.0	64.3	81.3
	中学１年生	100	68.0	52.0	80.0	62.0	64.0	82.0
	中学２年生	100	66.0	58.0	75.0	63.0	64.0	80.0
	中学３年生	100	69.0	60.0	84.0	76.0	65.0	82.0

【基数:対象者全体】

		(N)	将来、人のために役立つ仕事をしたいと思うようになった	何か人のために役立つことをするようになった	今生きていることを、感謝するようになった	日本や他の国の出来ごとについて考えるようになった	日本が好きになった	私たちのくらしや生活を良くしたいと思った
全　体		600	69.7	59.5	79.7	65.3	66.8	82.8
性別×学年別	小学生・男子	150	70.7	62.0	79.3	61.3	67.3	82.7
	小学４年生・男子	50	72.0	58.0	78.0	60.0	70.0	86.0
	小学５年生・男子	50	74.0	62.0	84.0	52.0	62.0	82.0
	小学６年生・男子	50	66.0	66.0	76.0	72.0	70.0	80.0
	小学生・女子	150	72.7	62.7	80.0	66.0	71.3	86.0
	小学４年生・女子	50	58.0	54.0	76.0	64.0	68.0	78.0
	小学５年生・女子	50	78.0	64.0	82.0	72.0	72.0	92.0
	小学６年生・女子	50	82.0	70.0	82.0	62.0	74.0	88.0
	中学生・男子	150	64.0	48.7	75.3	64.7	60.0	77.3
	中学１年生・男子	50	66.0	42.0	78.0	66.0	64.0	82.0
	中学２年生・男子	50	62.0	54.0	70.0	66.0	68.0	78.0
	中学３年生・男子	50	64.0	50.0	78.0	62.0	48.0	72.0
	中学生・女子	150	71.3	64.7	84.0	69.3	68.7	85.3
	中学１年生・女子	50	70.0	62.0	82.0	58.0	64.0	82.0
	中学２年生・女子	50	70.0	62.0	80.0	60.0	60.0	82.0
	中学３年生・女子	50	74.0	70.0	90.0	90.0	82.0	92.0

【基数:対象者全体】

一つ目は、被災地を含む「東北」エリアにおいて、全７エリアの中で、Q17「何か人のために役立つことをするようになった」という項目と、Q21「日本やほかの国のできごとについて考えるようになった」という項目の肯定率が１位になったことである。つまり、被災地を含むエリアでは、行動面

の実践が難しいにもかかわらず多くの子どもたちが実際に利他的な行動を実施していることと、被災地を支援してくれている世界中の多くの国々のことについてまで視野を広げて考えられるようになったことを意味している。このような被災地とその近郊にある地域で、子どもたちのこうした利他的な行動や視野の広い思考力の出現は、震災による甚大な被害という厳しい現実の中にあって、子どもたちが強い精神をもって人間として価値ある生き方をしているという、これからの日本のあり方に希望と未来を与えてくれるうれしい事実である。

二つ目は、領域１「学校での生活の変化」で検討したように、直近で最大震度５弱の地震があった「中国・四国」エリアで、全体の平均肯定率と比較して、ほとんどの項目において５％ないしは10％も高い肯定率を示していることである。

なお、東日本・西日本というエリア区分については、一貫した大きな傾向性はみられなかった。ただしもし、「中国･四国」エリアが直近で震災を受けなかったならば、東日本エリアの方が一貫して高い肯定率を示していたかもしれない。

次に、領域３の内、大きな分類の二つ目にあたる、Q16「尊敬する人ができた」に関する回答結果について、図表20をみてみると、やはり「東北」エリアの児童生徒の51.5％が「できた」と回答しており、全７エリア中で最も高い肯定率となっている。

図表20　【Q16】尊敬する人ができた

【基数：対象者全体】（％）

		できた	できていない
全　体		33.0	67.0
エリア区分	北海道	44.0	56.0
	東北	51.5	48.5
	関東・甲信越	30.2	69.8
	中部	32.9	67.1
	近畿	28.8	71.2
	中国・四国	32.5	67.5
	九州	40.4	59.6
東西エリア区分	東日本	33.2	66.8
	西日本	32.7	67.3
子ども性別	男子	31.7	68.3
	女子	34.3	65.7
学年別	小学生（計）	36.0	64.0
	小学4年生	34.0	66.0
	小学5年生	36.0	64.0
	小学6年生	38.0	62.0
	中学生（計）	30.0	70.0
	中学1年生	24.0	76.0
	中学2年生	31.0	69.0
	中学3年生	35.0	65.0

【基数：対象者全体】（％）

		できた	できていない
全　体		33.0	67.0
性別×学年別	小学生・男子	33.3	66.7
	小学4年生・男子	40.0	60.0
	小学5年生・男子	30.0	70.0
	小学6年生・男子	30.0	70.0
	小学生・女子	38.7	61.3
	小学4年生・女子	28.0	72.0
	小学5年生・女子	42.0	58.0
	小学6年生・女子	46.0	54.0
	中学生・男子	30.0	70.0
	中学1年生・男子	24.0	76.0
	中学2年生・男子	32.0	68.0
	中学3年生・男子	34.0	66.0
	中学生・女子	30.0	70.0
	中学1年生・女子	24.0	76.0
	中学2年生・女子	30.0	70.0
	中学3年生・女子	36.0	64.0

そして最後に、大きな分類の三つ目にあたる、Q19「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（複数回答可）」と、同項目で反応形式が異なる項目Q20「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（一番大切だと思うもの１つ）」の２項目について、それぞれのエリア別回答結果をみてみよう（図表21）。

図表21　【Q19,20】地震の前よりも大切なもの

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない	平均反応数
Q19複数回答		600	80.2	63.3	20.7	8.0	27.2	75.3	47.2	50.0	3.8	3.7
エリア区分	北海道	＊25	84.0	64.0	16.0	8.0	28.0	80.0	52.0	48.0	8.0	3.8
	東北	33	84.8	69.7	15.2	3.0	27.3	90.9	45.5	51.5	-	3.9
	関東・甲信越	255	81.2	66.7	20.8	8.6	28.2	73.7	52.2	54.1	3.1	3.9
	中部	70	72.9	50.0	11.4	7.1	20.0	74.3	40.0	45.7	7.1	3.2
	近畿	125	72.8	56.0	18.4	7.2	24.8	71.2	40.8	42.4	3.2	3.3
	中国・四国	40	85.0	65.0	37.5	10.0	25.0	82.5	45.0	50.0	5.0	4.0
	九州・沖縄	52	94.2	76.9	30.8	9.6	38.5	76.9	48.1	53.8	3.8	4.3
東西エリア区分	東日本	325	81.5	66.5	19.4	8.0	27.4	76.6	50.5	52.6	3.1	3.8
	西日本	275	78.5	59.6	22.2	8.0	26.9	73.8	43.3	46.9	4.7	3.6
子ども性別	男子	300	78.3	60.7	19.0	8.0	27.0	76.7	49.0	52.7	4.0	3.7
	女子	300	82.0	66.0	22.3	8.0	27.3	74.0	45.3	47.3	3.7	3.7
学年別	小学生（計）	300	84.0	67.7	19.7	7.0	29.0	76.3	48.3	53.0	3.7	3.9
	小学４年生	100	84.0	69.0	25.0	10.0	34.0	80.0	55.0	54.0	-	4.1
	小学５年生	100	89.0	72.0	14.0	4.0	25.0	75.0	43.0	55.0	3.0	3.8
	小学６年生	100	79.0	62.0	20.0	7.0	28.0	74.0	47.0	50.0	8.0	3.7
	中学生（計）	300	76.3	59.0	21.7	9.0	25.3	74.3	46.0	47.0	4.0	3.6
	中学１年生	100	73.0	56.0	16.0	9.0	24.0	74.0	46.0	47.0	5.0	3.5
	中学２年生	100	79.0	62.0	21.0	10.0	27.0	75.0	51.0	50.0	2.0	3.8
	中学３年生	100	77.0	59.0	28.0	8.0	25.0	74.0	41.0	44.0	5.0	3.6

【基数:対象者全体】

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない	平均反応数
Q19複数回答		600	80.2	63.3	20.7	8.0	27.2	75.3	47.2	50.0	3.8	3.7
性別×学年別	小学生・男子	150	82.7	65.3	18.0	6.7	25.3	74.7	49.3	53.3	4.7	3.8
	小学４年生・男子	50	84.0	68.0	18.0	6.0	28.0	82.0	58.0	54.0	-	4.0
	小学５年生・男子	50	88.0	68.0	14.0	6.0	22.0	76.0	48.0	54.0	4.0	3.8
	小学６年生・男子	50	76.0	60.0	22.0	8.0	26.0	66.0	42.0	52.0	10.0	3.5
	小学生・女子	150	85.3	70.0	21.3	7.3	32.7	78.0	47.3	52.7	2.7	4.0
	小学４年生・女子	50	84.0	70.0	32.0	14.0	40.0	78.0	52.0	54.0	-	4.2
	小学５年生・女子	50	90.0	76.0	14.0	2.0	28.0	74.0	38.0	56.0	2.0	3.8
	小学６年生・女子	50	82.0	64.0	18.0	6.0	30.0	82.0	52.0	48.0	6.0	3.8
	中学生・男子	150	74.0	56.0	20.0	9.3	28.7	78.7	48.7	52.0	3.3	3.7
	中学１年生・男子	50	74.0	56.0	12.0	6.0	26.0	76.0	46.0	50.0	2.0	3.5
	中学２年生・男子	50	74.0	54.0	20.0	12.0	24.0	80.0	50.0	56.0	2.0	3.7
	中学３年生・男子	50	74.0	58.0	28.0	10.0	36.0	80.0	50.0	50.0	6.0	3.9
	中学生・女子	150	78.7	62.0	23.3	8.7	22.0	70.0	43.3	42.0	4.7	3.5
	中学１年生・女子	50	72.0	56.0	20.0	12.0	22.0	72.0	46.0	44.0	8.0	3.4
	中学２年生・女子	50	84.0	70.0	22.0	8.0	30.0	70.0	52.0	44.0	2.0	3.8
	中学３年生・女子	50	80.0	60.0	28.0	6.0	14.0	68.0	32.0	38.0	4.0	3.3

【基数:対象者全体】

図表22　【Q20】地震の前よりも大切なもの

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない
全　体		600	46.5	1.5	1.0	0.3	1.8	37.5	3.0	4.5	3.8
エリア区分	北海道	＊25	52.0	-	-	-	-	36.0	-	4.0	8.0
	東北	33	42.4	6.1	-	-	-	48.5	-	3.0	-
	関東・甲信越	255	43.5	2.0	1.6	0.4	2.4	37.3	4.7	5.1	3.1
	中部	70	41.4	-	-	1.4	1.4	42.9	-	5.7	7.1
	近畿	125	49.6	0.8	0.8	-	1.6	36.8	3.2	4.0	3.2
	中国・四国	40	42.5	2.5	2.5	-	5.0	35.0	2.5	5.0	5.0
	九州・沖縄	52	63.5	-	-	-	-	28.8	1.9	1.9	3.8
東西エリア区分	東日本	325	43.4	2.2	1.2	0.3	2.2	39.4	3.7	4.6	3.1
	西日本	275	50.2	0.7	0.7	0.4	1.5	35.3	2.2	4.4	4.7
子ども性別	男子	300	46.3	1.0	0.7	0.3	1.7	38.0	3.3	4.7	4.0
	女子	300	46.7	2.0	1.3	0.3	2.0	37.0	2.7	4.3	3.7
学年別	小学生（計）	300	52.0	1.0	-	-	1.3	35.0	2.3	4.7	3.7
	小学４年生	100	52.0	2.0	-	-	2.0	38.0	2.0	4.0	-
	小学５年生	100	53.0	-	-	-	-	37.0	2.0	5.0	3.0
	小学６年生	100	51.0	1.0	-	-	2.0	30.0	3.0	5.0	8.0
	中学生（計）	300	41.0	2.0	2.0	0.7	2.3	40.0	3.7	4.3	4.0
	中学１年生	100	40.0	1.0	1.0	-	3.0	39.0	4.0	7.0	5.0
	中学２年生	100	39.0	2.0	2.0	1.0	3.0	42.0	4.0	5.0	2.0
	中学３年生	100	44.0	3.0	3.0	1.0	1.0	39.0	3.0	1.0	5.0

【基数:対象者全体】

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない
全　体		600	46.5	1.5	1.0	0.3	1.8	37.5	3.0	4.5	3.8
性別×学年別	小学生・男子	150	56.0	0.7	-	-	0.7	30.7	3.3	4.0	4.7
	小学４年生・男子	50	60.0	-	-	-	2.0	32.0	2.0	4.0	-
	小学５年生・男子	50	54.0	-	-	-	-	38.0	2.0	2.0	4.0
	小学６年生・男子	50	54.0	2.0	-	-	-	22.0	6.0	6.0	10.0
	小学生・女子	150	48.0	1.3	-	-	2.0	39.3	1.3	5.3	2.7
	小学４年生・女子	50	44.0	4.0	-	-	2.0	44.0	2.0	4.0	-
	小学５年生・女子	50	52.0	-	-	-	-	36.0	2.0	8.0	2.0
	小学６年生・女子	50	48.0	-	-	-	4.0	38.0	-	4.0	6.0
	中学生・男子	150	36.7	1.3	1.3	0.7	2.7	45.3	3.3	5.3	3.3
	中学１年生・男子	50	38.0	2.0	2.0	-	2.0	38.0	6.0	10.0	2.0
	中学２年生・男子	50	30.0	-	-	2.0	4.0	56.0	2.0	4.0	2.0
	中学３年生・男子	50	42.0	2.0	2.0	-	2.0	42.0	2.0	2.0	6.0
	中学生・女子	150	45.3	2.7	2.7	0.7	2.0	34.7	4.0	3.3	4.7
	中学１年生・女子	50	42.0	-	-	-	4.0	40.0	2.0	4.0	8.0
	中学２年生・女子	50	48.0	4.0	4.0	-	2.0	28.0	6.0	6.0	2.0
	中学３年生・女子	50	46.0	4.0	4.0	2.0	-	36.0	4.0	-	4.0

【基数:対象者全体】

ここで最も特徴的なことは、被災地を含む「東北」エリアの児童生徒については、全調査対象者600名の児童生徒が示す優先順位が僅差で逆転し、複数回答であっても、また単一回答であっても、選択率で１位が命となり２位が家族となる。やはり被災地およびその周辺の地域においては、多くの尊い命が身近で理不尽にも奪われる状況を経験することにより、子どもたちは命を最も大切なものであるととらえていることが推測される。

（３）学年別・性別の傾向

次に、図表19に戻って、「将来の夢・人生観」に関する６項目の学年別・性別の回答結果についてみてみると、次のような２点が明らかとなった。

１点目は、６項目全てにおいて、女子の方が男子よりも肯定率が高かったことである。さらに２点目として、小学６年生・女子と中学３年生・女子が多くの項目において、高い肯定率を示していることである。こうした傾向は、これまでの分析結果と同様の結果となっていることから、各学校段階の最上級生である女子が、比較的強く震災の影響を受けて、行動面や意識面において変化を示すようになることがわかった。

さらに、図表20のQ16「尊敬する人ができた」に関しては、小学５年生・女子と小学６年生・女子が、それぞれ、42.0％そして46.0％と高い肯定率を示している。

最後に、Q19「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（複数回答可）」と、同項目で反応形式が異なる項目Q20「地震の前よりも大切だと思うようになったもの（一番大切だと思うもの１つ）」の２項目について、それぞれの学年別・性別の回答結果をみてみよう（図表21および図表22）。

あまり一貫した大きな差異はないが、どちらかといえば、女子の方が「家族」や「友だち」といった人を大切に思う傾向があるのに対して、男子は、「命」や「健康」といった身体を大切に思う傾向がある。ただし、学年と性別をかけ合わせてみてみると、女子の方が「家族」を大切にしているようにみえていたが、実は、その項目について中学生・男子の肯定率が低いことによって生じた傾向であることがわかる。さらに、男子が「命」を大切にしているようにみえていたが、実は、中学生・男子の肯定率が高いことによって生じた傾向であることがわかる。いいかえるならば、小学生･男子は、「家族」や「命」といった震災後に大切にしているものについて、女子と同じような回答傾向を示すことがわかった。しかし、本調査においては、その原因を明らかにすることはできない。

（４）被災地の特徴

まず、図表23からわかることは、被災地３県の児童生徒は、６項目全てについて、最も高い肯定率を示していることである。つまり、将来の夢や人生観について、被災地およびその周辺の地域においては、自分のこれからの望ましいあり方や生き方について強く考えるようになっているといえるだろう。その中でも、特に、被災地３県のQ17「何か人のために役立つことをするようになった」とQ21「日本やほかの国のできごとについて考えるようになった」という項目における肯定率が他のエリアよりも顕著に高くなっている。

図表23　【Q15,17,18,21～23】将来の夢・人生観

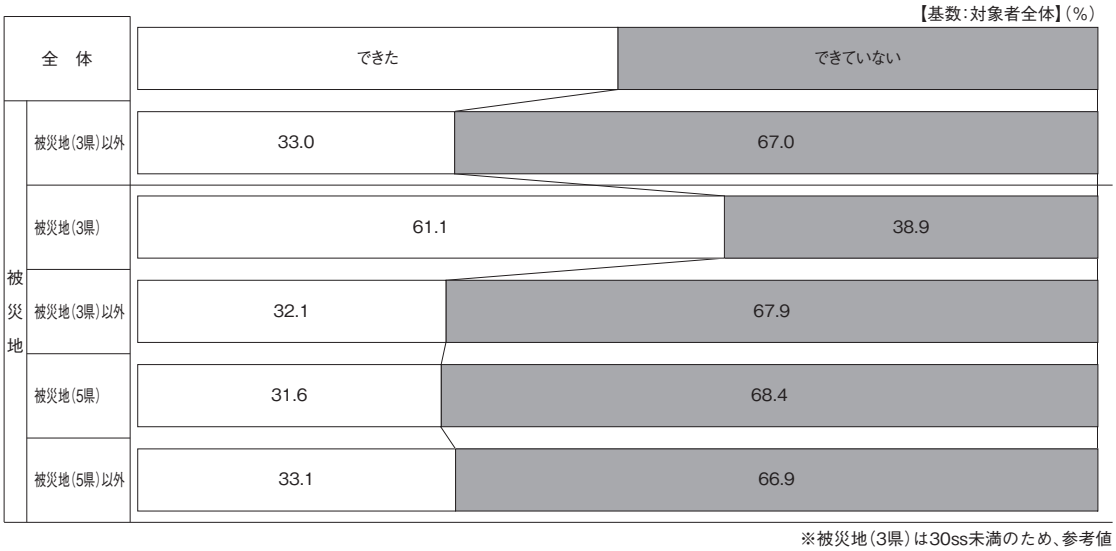
		(N)	将来、人のために役立つ仕事をしたいと思うようになった	何か人のために役立つことをするようになった	今生きていることを、感謝するようになった	日本や他の国の出来ごとについて考えるようになった	日本が好きになった	私たちのくらしや生活を良くしたいと思った
全　体		600	69.7	59.5	79.7	65.3	66.8	82.8
被災地	被災地（３県）	＊18	77.8	77.8	83.3	83.3	72.2	83.3
	被災地（３県）以外	582	69.4	58.9	79.6	64.8	66.7	82.8
	被災地（５県）	57	66.7	59.6	73.7	66.7	63.2	82.5
	被災地（５県）以外	543	70.0	59.5	80.3	65.2	67.2	82.9

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　　【基数:対象者全体】

次に、図表24をみてみると、被災地３県のQ16「尊敬する人ができた」に関する児童生徒の肯定率が、

61.1％となっており、他のエリアと比較して倍近くの差が出ている。

図表24　【Q16】尊敬する人ができた



最後に、図表25および図表26により、被災地の児童生徒にどのような特徴的な回答がみられるかについて、検討してみる。そうすると、やはり被災地３県の児童生徒は、他のエリアの児童生徒に比べて、「命」を震災後に最も大切なものとしてとらえていることがわかる。

図表25　【Q19,20】地震の前よりも大切なもの

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない	平均反応数
Q19 MA全体		600	80.2	63.3	20.7	8.0	27.2	75.3	47.2	50.0	3.8	3.7
被災地	被災地（３県）	＊18	83.3	66.7	22.2	5.6	27.8	83.3	50.0	55.6	-	3.9
	被災地（３県）以外	582	80.1	63.2	20.6	8.1	27.1	75.1	47.1	49.8	4.0	3.7
	被災地（５県）	57	84.2	66.7	17.5	10.5	28.1	77.2	52.6	50.9	-	3.9
	被災地（５県）以外	543	79.7	63.0	21.0	7.7	27.1	75.1	46.6	49.9	4.2	3.7
Q20 SA全体		600	46.5	1.5	1.0	0.3	1.8	37.5	3.0	4.5	3.8	-

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　【基数:対象者全体】

図表26　【Q20】地震の前よりも大切なもの

		(N)	家族	友だち	夢	成績	お金	命	健康	助け合い	あてはまるものはない
全　体		600	46.5	1.5	1.0	0.3	1.8	37.5	3.0	4.5	3.8
被災地	被災地（３県）	＊18	33.3	5.6	-	-	-	55.6	-	5.6	-
	被災地（３県）以外	582	46.9	1.4	1.0	0.3	1.9	36.9	3.1	4.5	4.0
	被災地（５県）	57	36.8	3.5	-	-	5.3	49.1	1.8	3.5	-
	被災地（５県）以外	543	47.5	1.3	1.1	0.4	1.5	36.3	3.1	4.6	4.2

※被災地（3県）は30ss未満のため、参考値　【基数:対象者全体】

３．総括

以上のように、質問項目の領域ごとに、児童生徒の回答の特徴を分析・考察してきた。

全体の分析を通して感じたことは、震災後に子どもたちは、学校と家庭の生活、そして将来の夢や生き方について、前向きで利他的な意識をもつとともに、積極的な行動を行っていることである。

東北大震災という未曽有の被害を受けながらも、被災地であれ、あるいは被災地から離れた地域であれ、子どもたちは人と人との支え合いの大切さを改めて認識し、家族や友だち、そして命と健康を大切にしようとする意識に基づいて、まじめにそしてひたむきに生きようとしているように思える。

ただし、本調査が小規模なインターネット調査であることから、この報告書で分析・考察した結果が、我が国の小中学生の全体像を正確に描き出しているとはいえないという限界も誠実に認識しなければならない。

しかしながら、ここで得られた、子どもたちの生活と意識に関する最新の情報は、学校と家庭の両面において、これからの命の教育と防災教育の在り方を考えるうえで貴重なものであると信じる。

まとめ直すならば、そうした震災後の日本の教育の在り方を考えるうえで、次の５点が重要であることがわかった。

①　全体的に、中学生・男子の肯定的な意識や行動が低くなる傾向があるので、高い意識を持つ女子の考え方や行動について発表させたり、交流させたりして、性差を最小限に収めるように工夫すること。

②　意識面での変化に比べて、行動面での変化が生まれにくい傾向があるので、特に学校教育の場面では総合的な学習の時間や学校行事を通して、利他的な活動、例えば多様なボランティア活動に取り組ませるなどの工夫が必要である。

③　家庭教育においては、利他的な行動である、家事の分担や地域でのボランティア活動への参加を促すような声かけや取り組みが大切である。

④　小規模な震災が発生した地域では、新しい防災教育の実践に余力がある場合においては、時間をおかずにすぐに実践することが、子どもの前向きで肯定的な生活と生き方の変化を促すうえで効果的である。

⑤　被災地からの距離によって、子どもの意識や行動の変化に違いがみられることがあっても当然のことであるが、可能な限りにおいて、いわば「震災理解教育」と呼べるような、被災地の真の姿を理解し、直接的な被災地とその他の地域の人々が協力して、震災からの復旧・復興を協働で成し遂げようとする意識を育てることを通して、防災教育の効果にかかわる地域間格差が生じないようにすることが重要である。

我が国の教育の在り方は、阪神淡路大震災とこの度の東北大震災によって、新時代の局面を迎えたといってよい。また、今後も同様の甚大な被害をもたらす震災が起こらないとも限らない。そうであるからこそ、本調査研究で得られた子どもたちの最新の情報を基にして、これからの命の教育と防災教育の在り方を継続して真摯に考え続けたい。

４．謝辞

今回のアンケート調査にご協力くださいました、全国の保護者、そして小中学生の皆様に心より御礼を申し上げます。

添付資料：調査票

＜本調査＞

ここからの質問は、対象となるお子様にお答え頂きます。
アンケートの対象となるお子様とお代わり下さい。
なお、このアンケートは途中保存されるので、一時休止しても、途中の質問から再開することができます。
アンケート回答の準備ができましたら、送信ボタンをクリックしてください。

改ページ

３月11日に起きた地震（じしん）の後の、あなたの学校や家での生活の様子についておたずねします。
これからするそれぞれの質問について、あなたの考えにもっとも近いものを選んでください。

改ページ

まず、地震（じしん）の後の【学校での生活】についておたずねします。
地震（じしん）の前とくらべて、何かかわったことはありますか。
次のことについてどれくらいあてはまるか、それぞれ１つずつ選んで下さい。

Q1　学校に通えることが幸せだと感じるようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q2　もっと勉強しなければと思うようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q3　先生を尊敬（そんけい）するようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q4　友だちに、「ありがとう」と言うようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q5　係や当番の活動に、すすんで取り組むようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

改ページ

つぎに、地震（じしん）の後の【家での生活】についておたずねします。
地震（じしん）の前とくらべて、何かかわったことはありますか。次のことについてどれくらいあてはまるか、それぞれ１つずつ選んで下さい。

Q6　家で勉強する時間が増えた。

1　増えた
2　変わらない
3　減った

Q7　学校から帰ってきた後に、友だちと遊ぶ時間が増えた。

1　増えた
2　変わらない
3　減った

Q8　家族や友だちは大切だと思うようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q9　家族と一緒にいると、ほっとするようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q10　お家の人（お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんなど）を尊敬（そんけい）するようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q11　家族みんなでいっしょに話したり遊んだりすることが多くなった。

1　多くなった
2　変わらない
3　少なくなった

Q12　お家の人から、しかられることが多くなった。

1　多くなった
2　変わらない
3　少なくなった

Q13　お家の人から、ほめられることが多くなった。

1　多くなった
2　変わらない
3　少なくなった

Q14　家でお手伝いをすることが多くなった。

1　多くなった
2　変わらない
3　少なくなった

改ページ

つぎに、地震（じしん）の後の【あなたが思うこと】についておたずねします。
地震（じしん）の前とくらべて、何かかわったことはありますか。次のことについてどれくらいあてはまるか、それぞれ１つずつ選んで下さい。

Q15　将来（しょうらい）、人のために役立つ仕事をしたいと思うようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q16　尊敬（そんけい）する人ができた。

1　できた
2　できていない

Q17　何か人のために役立つことをするようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q18　今生きていること（くらしや生活）を、感謝（かんしゃ）するようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

改ページ

ひき続き、地震（じしん）の後の【あなたが思うこと】についておたずねします。
次のことについて、あてはまるものをすべて選んで下さい。

Q19　生きていく（くらしや生活）上で、地震（じしん）の前よりも大切だと思うようになったものはありますか。以下のなかからあてはまるものをすべて選んで下さい。（いくつでも）

1　家族（かぞく）
2　友だち（ともだち）
3　夢（ゆめ）
4　成績（せいせき）
5　お金（おかね）
6　命（いのち）
7　健康（けんこう）
8　助け合い（たすけあい）
9　あてはまるものはない

改ページ

前の質問で答えた、【地震（じしん）の前よりも大切だと思うようになったもの】についておたずねします。

Q20　そのなかでも、1 番大切だと思うものはどれですか。下にあるなかであてはまるものをひとつだけ選んで下さい。

1　家族（かぞく）
2　友だち（ともだち）
3　夢（ゆめ）
4　成績（せいせき）
5　お金（おかね）
6　命（いのち）
7　健康（けんこう）
8　助け合い（たすけあい）

改ページ

ひき続き、地震（じしん）の後の【あなたが思うこと】についておたずねします。
地震（じしん）の前とくらべて、何かかわったことはありますか。
次のことについてどれくらいあてはまるか、それぞれ 1 つずつ選んで下さい。

Q21　日本やほかの国のできごとについて考えるようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q22　日本が好きになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない

Q23　私たちのくらしや生活をよくしたいと思うようになった。

1　あてはまる
2　どちらかといえば、あてはまる
3　どちらかといえば、あてはまらない
4　あてはまらない